

## スタディツアー（大学編）（2016）実施結果

2017年2月5日（日）に第2回スタディツアー（大学編）として「地域社会と大学がタッグを組んで、若い力を活かす！」を神奈川大学湘南ひらつかキャンパスにて開催しました。

当日は経営学部の2人の先生が主体となって地域を巻き込んだ実践的な取り組みが行われている2つのケースを紹介いただき、学生や協働相手の視点からの発表も交えながら進行了しました。最後には参加者相互で、「大学とどのように協働できそうか？」や「若い世代が活躍する場づくり」について意見交換を行いました。

---

### ●当日のプログラム

【日時】平成29年（2017年）2月21日（火）13時～16時45分

【参加者】20名

13時00分 Case1「地域との協働が学びを深化させる！みかんの楽校や学外と連携したインターンシップの取り組み」

14時30分 Case2「キャンパス内、地域に開かれた創り手たちの秘密基地！ファブラボひらつかの取り組みから見てきたこと」

16時00分 質疑応答、グループディスカッション

16時45分 終了

【Case1】 経営学部准教授 山岡義卓氏

「地域との協働が学びを深化させる！みかんの楽校や学外と連携したインターンシップの取り組み」

《話題提供者》

原 裕美さん（まるひろ園）

福岡 麻里さん（経営学部国際経営学科4年）/宮下 栞さん（経営学部国際経営学科2年）

【Case2】 経営学部准教授 道用大介氏

「キャンパス内、地域に開かれた創り手たちの秘密基地！ファブラボひらつかの取り組みから見てきたこと」

《話題提供者》

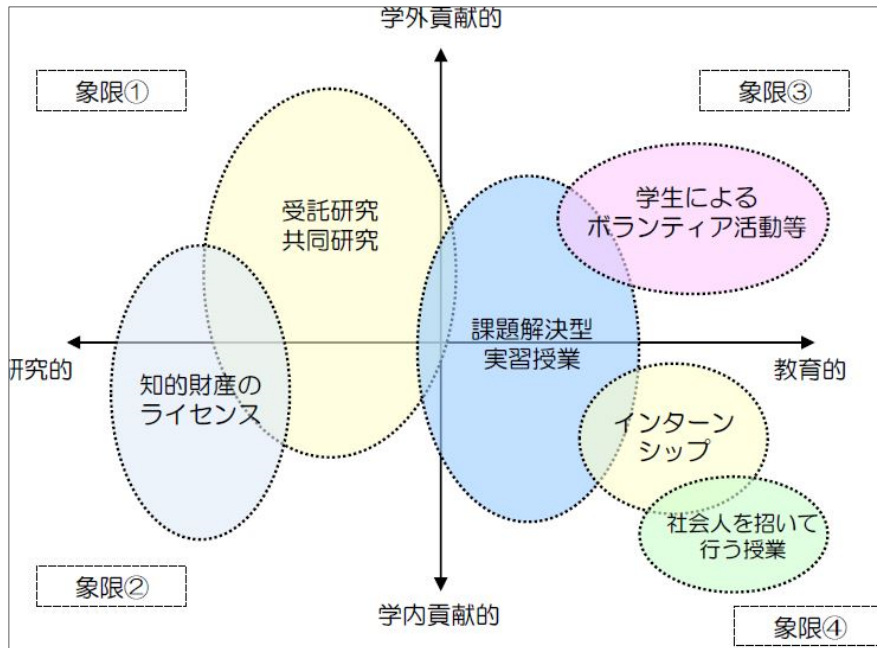
辻良太郎さん（経営学部国際経営学科3年）

●概要

Case1

・大学は教育と研究を本来的な使命としてきているが、「地域連携や社会貢献」を第三の使命としてとらえていくべきなのではないか、というご指摘とともに、多様な大学と地域との連携の形について図示する形でお話いただきました。

(図)山岡義卓, ソーシャルデザインから見た大学の地域連携活動  
—大学の地域連携活動のあり方に関する一考察—, 東京家政学院大学紀要 (53), p101-108, (2013)



- ・図のうち、伊勢原の農家「まるひろ園」でのボランティアプロジェクトである「みかんの楽校」  
<http://ameblo.jp/mikan-no-gakkou/>について、学生代表と受け入れる農家「まるひろ園」のそれぞれの視点から発表がありました。
- ・年間を通じて、農作業の手伝いや、「ききみかん」等のイベント実施など、学生チームが主体的に企画に携わりながら、継続した活動を行っています。
- ・農家さんと学生チームとで対話を重ねる中で関係性が築かれ、学生側は「必要とされている」ということをモチベーションに、まるひろ園のみかんの魅力を伝えるチラシや動画を制作する等、意欲的に取り組んでいきました。
- ・農家さんの方も、小さな子どもがいる家庭の親子が泥だらけになること、汚れること、に抵抗を感じている様子を目にし、親子に参加してもらって農業体験等、新たにチャレンジしていきたいことも芽生え始めたそうです。想いを率直に学生たちにも話し合いながら、次の活動が模索されています。



・もう一つの事例として、NPO法人まちづくりスポット茅ヶ崎で半年間、インターンシップを経験した学生から、「若者×NPOインターンシップ」の取組の紹介がありました。この取組は、「地域でつながるワカモノ×NPOインターンシッププログラム2016」というプログラムの一環で、認定NPO法人 藤沢市市民活動推進連絡会の主催、公益財団法人トヨタ財団の助成で行われたものです。

- ・大学進学をきっかけに神奈川県に移り住み、漠然と地域のつながりづくりへの関心をもったことが、インターンシップに参加したきっかけ。NPO法人まちづくりスポット茅ヶ崎自体が、立上げ期ということもあり、指示・指導が丁寧にできる状況ではない中で、メンバーの一員として、学生が自ら企画に参画。乳幼児連れの親子を対象としたイベントの実施など、成果が生み出されました。
- ・最後に3名の話者提供者に対し会場からの質疑を実施。「学生が活動にのめりこむポイントがどこにあったのか。」また、「受入側から見て協働の意義がどこにあったのか。」等について掘り下げる質問がありました。



## Case 2

- ・初めに、ファブラボひらつかを見学。3Dプリンターや、レーザー加工機でどんなことができるのか、またどんな方が普段、利用しているのか等について、**学生から**説明がありました。
- ・その後、これまでの取り組み経過について、道用先生からレクチャーがありました。マサチューセッツ工科大学を中心に世界中でネットワークが広がり、現在1000箇所ほど創られている等、世界的な広がりを見せているファブラボ、そんな中で神奈川大学湘南ひらつかキャンパスのファブラボは、日本で初めて大学のキャンパス内に開設されました。  
ビジネスプランコンテスト等に出される学生達のビジネスプランに接し、「ものづくりのイメージに乏しく、机上の空論で書かれ、実利に合わない商品アイデア等が多いこと」にかねてより問題意識を持っていた道用先生は、経営学部の学生にとってもものづくりが身近なものになることを目指し、ファブラボの立上げを決意されます。が、その道のりは簡単なものではなかったようです。
- ・学生が具体的に関わったプロジェクトとしては、湘南地域のサーファーが着用するウェットスーツの端材に着目して生まれた傘入れ、神奈川の間伐材を用いたサーフボード作り等、たくさんのプロジェクトがこの場から生まれています。
- ・また、竹害が深刻になっている地域の課題に着目し、竹を使ってキャンプのテントフレームをつくる等の実験的な試みも行われました。
- ・一方企業からは、「子ども達にもものづくりの楽しさにふれてほしい。」ということで、ワークショップ企画運営の相談が持ち込まれる等、自然と連携の相談が舞い込む拠点となっています。
- ・立ち上げから数年が経過し、主に口コミや紹介で新しい企業の方やプロダクトデザイナーが訪れるようになりました。また留学生もこの場に来ると、コミュニケーションが活発になる等、学生**同士**の創発の拠点になっているといえそうです。
- ・ファブラボはものづくりをするだけでなく、人がつながり、地域の様々な主体による協働が生み出される機能をもった地域に開かれた拠点である、という可能性を感じるケースとなりました。





【参加者の気づきを一部紹介】

- ・学生たちが地域との関わりを通じて多くのことを学び、成長している様子に感銘を受けました。
- ・大学とのつながりをどう持っていけばよいか考えたい。情報を集めます。
- ・企業と同様に大学においても社会貢献の場を求めていることを知るよい機会となった。

\*スタディツアー（大学編）は、NPO 法人 ETIC.と神奈川県が協働して実施しました。